

COIL 型授業でアカデミック・インテグリティを実践した授業報告  
—台湾、致理科技大學と本学のアカデミック・ライティング—  
A Progress Report: a COIL-Based Global Course for Academic Writing  
with Academic Integrity Mindset

山本敏幸（関西大学教育推進部）

林康弘（武蔵野大学データサイエンス学部）

渡邊正樹（iJapan 株式会社）

Ru-Shan Chen (Chihlee University of Technology, Department of Applied English)

**キーワード** COIL 型授業、ICT 活用、アカデミック・ライティング、アカデミック・インテグリティ、グローバル・リベラルアート教育、学習環境／Academic Writing, COIL-based Learning, ICT-Enhanced Learning, Academic Integrity, Turnitin Feedback Studio

## 1. 概要

2019 年度秋学期にクラウド系の ICT を活用したアカデミック・ライティングの学習領域で COIL 型授業をおこなった。致理科技大學の Ru-Shan Chen 准教授が担当する学部生対象のライティングコースと本学の COIL 型ライティングコース「国際プロジェクト型学習（アカデミックスキルズ&コミュニケーション）」との2校間の教員間・受講生間の協働授業である。クラウドサービスを基盤としてバーチャルな学習空間を構築し、本学の受講生と致理科技大學の学生が協働チームでプロジェクトを進める Team-Based Learning 型の協働授業をおこなった。さらに、個々人の受講生のアカデミック・インテグリティの意識や姿勢を涵養し、円滑なライティング指導・評価やフィードバックを公平且つ高品質でおこなうための工夫として米国 Turnitin LLC 提供の Turnitin Feedback Studio を採用した。台湾と日本とで相互に行うライティングの COIL 型授業においても、一つのプラットフォームでレポートの提出、チェック、添削、フィードバック、評価を行うことができるため、提出先、提出期限、評価の基準、結果の開示などについて、統一感を持ったクラス運営が可能となった。

以下のセクションで、クラウド系の ICT を活用したアカデミック・ライティングの学習領域での COIL 型授業で採用したクラウドサービス・アプリ等について、授業運営方法、アセスメントについて詳説する。

## 2. クラウドサービス・アプリ

未だ会ったこともない外国の学生たちと同じクラスの仲間として信頼関係を築き、混合チームで学びを深めるためには、学習のためのモチベーションの維持よりも前に、エンパシービルディングから始め、同じ仲間として受入れ、チームで学習理解を深めるためのチームビルディングが必須となる。この基本となる仲間として受け入れるエンパシービルディングの段階で、クラウドサービスアプリである FlipGrid® を活用した。

本学の受講生と致理大學の受講生全体がバーチャルクラスルームの中で、協働で学ぶ雰囲気をつくりモチベーションをあげるための工夫として、FlipGrid® を活用した。各自が自分についてのアピール点や信頼関係構築に必須と思う項目をマインドマップで作成し、それを使って自分のスマホで2分間の Pitch を自撮りし FlipGrid® の共有キャンバスにポストした。この FlipGrid® の共有キャンバスを通じて、クラスメイトの自己アピールビデオを閲覧し、コメントや質問ができるようになっている。（図1、図2を参照）。

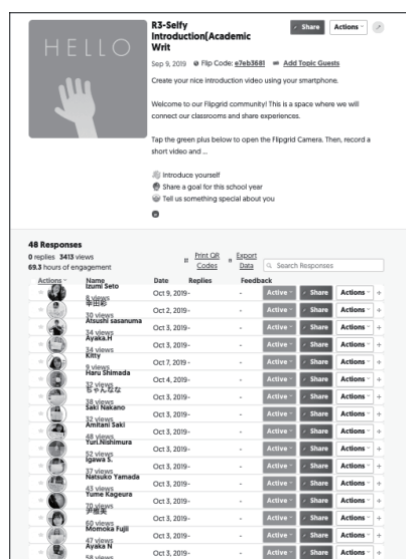


図1 Flipgrid®の投稿ビデオ

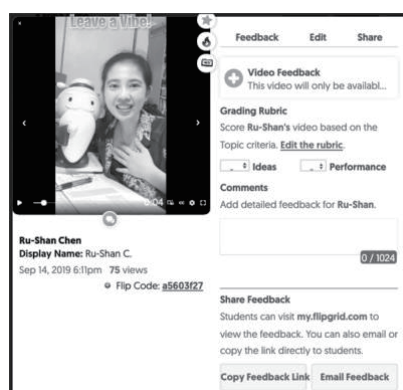


図2 Flipgrid®の投稿ビデオ閲覧の様子

一旦チームによる学習活動が始まると、チーム活動の成果物や進捗状況は、各チームで Pitch 形式の進捗報告ビデオを作成し、Flipgrid®で共有した。これにより、チーム内での学習活動の俯瞰的なふりかえりの機会が共有できた。さらに、本学の受講生間、台湾の致理大学の受講生全体で、他のチームがどんな状況であるのかも把握でき、自分達のチームの学習活動との比較が可能になった。つまり、両校の受講生が時差を克服していつでもどこでも同じページで繋がっているバーチャルクラスルームが担保できた。

## 2.1. 学びの共有 (課題)

非同期型の学びで、しかも、リッチメディアで学びを共有する際の工夫について述べる。仮に、

Flipgrid® を共有キャンパスとして、ピッチ形式で 2 分程度のビデオで、全チームの学びの進捗や成果を共有しようとしても、閲覧には時間がかかるし、受講者は俯瞰的に自分の学びと他の受講者との学びの比較・共有が難しい。COIL 形式の授業では直接面接型の臨場感のある学びの共有が物理的にできないため、受講者がいつでもどこでも、つまり、「24/7」で「いつでも同じページで」学んでいるという学習環境を維持・継続することが必要となる。

この視点からでは、Flipgrid® のキャンパスを活用した学びの共有は不向きである。両校の受講生がチーム間、且つ、バーチャルな合同クラスの中で、いつでもどこでも「同じページで」学んでいるという意識を失わずに、モチベーションを継続することが必須となる。

本授業では、Padlet®と Google Drive®のファイル共有機能を活用して、「同じページで」の学びを担保した。これについて、次のセクションで詳説する。

## 2.2. 学びの共有 (解決策) Padlet®, Google Drive®

開講時期全体を通して、両校の受講生、全員がチームメンバー間でもバーチャルなクラス全体間でも、「同じページで」の学びをいつでもどこでもできるようにするためには、一枚の大きなキャンパスにすべての受講生の学びの進捗と成果物を可視化することを工夫した。受講生全員が編集権限、閲覧権限をもつ Padlet®のキャンパスを活用した。

授業は1学期分の学びを3つのスプリントにわけた。(図3) (i) 各自がスマホで撮影した写真と 5W1H の情報を文書化して説明し、Twitter 風にレポートする Twitter Writing、(ii) Essay Writing、(iii) Research Paper で構成した。各スプリントでチームごとにコラムを配分し、チームメンバーで担当した。各チームのコラムには、チームの話し合いで合意したテーマの宣言（ビジュアルカード版とビデオ版）、学習活動の記録、チーム活動成果物

(パワーポイントファイルとビデオ版) が共有されている。



図3 各スプリントの構成レイアウト

図4は、(iii) Research Paper のスプリントの実際のキャンバス部分である。5週間分の本学と致理大学の混合チーム、TEAM A から TEAM K の学習活動の記録が図4にカラーコードされたラベルの順に表示されている。Padlet®を使う利点は、各チームのメンバーは自分のチームの学習活動の進捗状況をいつでも確認でき、しかも、他のチームの進捗状況も把握でき、自分のチームの進捗との比較も可能であることである。

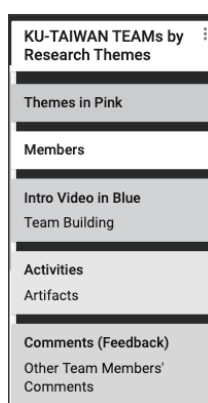


図4. カラーコードされたラベル

図5に示したように、(iii) Research Paper のスプリントの終盤では、Google Drive 上のチームごとの協働フォルダーで、学習成果の発表と共有の発表資料をメンバー全員で編集・作成し、Padlet®キャンバスで全メンバーに共有した。

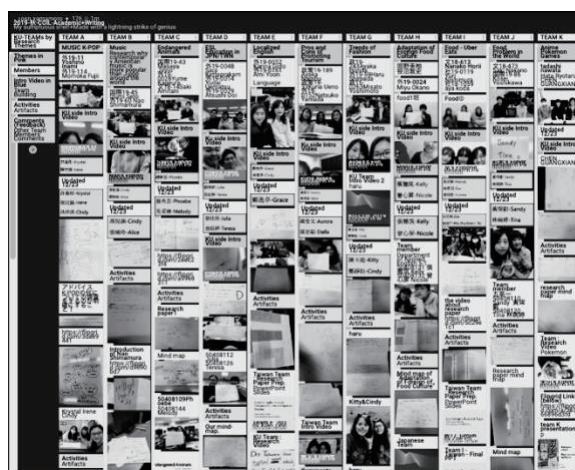


図5 (iii) Research Paper のスプリント部分、上半分

その後、同じチームのコラム後半にはそれぞれのメンバーが他のチームの学びの成果を確認し、建設的なコメントを書き、全体で共有をおこなった。このピアレビューを通して、最終ふりかえりのセッションでは、自分のチームの学習活動についてのふりかえりの機会を得ることができた。

(図6参照)



図6 (iii) Research Paper のスプリント部分 (下半分)

## 2.3. Turnitin Feedback Studio®によるアカデミックインテグリティと教育の質保証

受講生が提出するライティングの課題は Turnitin Feedback Studio®によりアカデミックインテグリティを担保し、教育の質保証と公平化をおこなった。このセクションでは、COIL 型授業で採用した米国 Turnitin LLC 提供の Turnitin Feedback Studio について解説する。Turnitin Feedback Studio は学生が作成した文書レポートについて、提出、剽窃チェックおよび添削、コメントを講師がオンラインで行う



ことができるクラウドサービスであり、世界150カ国で利用されている教育ツールである。

クラウドサービスの利点の一つは、各ユーザーにインターネットに接続できる環境とPCがあれば、作業場所を問わずレポートの提出、チェックが行えるというところにある。COIL型授業のように、国を超えたキャンパス間の相互学習環境ではこのツールの特徴を活かした利用が可能である。つまり、それぞれの科目担当者が別々のシステムで自身が担当する受講生の学びをモニターしたり管理したりするのではなく、共有するシステム環境で双方のキャンパスにいる受講生をバーチャルな一つのクラスルームで学んでいるかのような学習環境を提供出来るクラウドサービスである。言い換えると、台湾と日本とで相互に行うライティングの授業においても、一つのプラットフォームでレポートの提出、チェック、添削、評価を行うことができるため、提出先、提出期限、評価の基準、結果の開示などについて、統一感を持ったクラス運営が可能となる。

本COIL授業では、Essay Writingのセグメントで、ドラフト版の提出時に、添削、フィードバック、ルーブリックによるアセスメントで改善点の指摘をおこなった。その後、第2版の提出時に、改善点についてフィードバック、ピアレビューセッション、ルーブリックによる評価をおこなった。受講生からは、Turnitin Feedback Studio®が提供する明確且つ的確ですべての受講者に公平なライティングの支援システムに感動したというコメントが寄せられ、好評価であった。

### 2.3.1. Turnitin Feedback Studio®の準備と設定

ここでは、海外のCOIL協定運営校との両校間でTurnitin Feedback Studio®を活用する準備設定について紹介する。COIL型授業でTurnitin Feedback Studioを利用するには、授業運営側がTurnitin Feedback Studioの使用ライセンスを持っていることが前提となる。今回はiGroup Japan社の協力により利用検証用の特別ライセンスを使用した。

先ず、サイト管理者権限で、講師アカウントを作成する。講師アカウントが付与された講師は、講師アカウント内にCOIL用のクラスを作成し、日本側、台湾側の学生を登録、紐付けした。添削講師を複数置く場合は、マスタークラスを作成し、ティーチングアシスタントとして複数の講師を配置した。共通課題について複数の講師が提出物をチェックする環境（開示期日、提出締め切り、簡易指示、ルーブリック評価表、簡易利用マニュアル等）を準備した。ライティング課題を設定し、学生の提出、QuickMarkという添削マーカーの設定、添削及び改善アドバイス、公平且つ平等に評価するための評価軸となるルーブリックの作成などを事前に行っておいた。

### 3. 提出物の剽窃チェック

提出された課題については、自動で剽窃チェックを行った。これはシステムがもつ剽窃チェック用データベースに英語、日本語、中国語など各国語の剽窃チェック用テキストデータベースがあり、それらのデータと比較照合することにより、提出物の文章が既出の文章と同じかどうかをチェックできる仕組みである。今回は単語5つ以上の連鎖が同一である文書について剽窃チェックをおこなった。この剽窃チェック機能は剽窃率の%表示、コピー元までも表示できるため、アカデミック・インテグリティの意識を高めるにはかなりの効果があった。ドラフトの提出で剽窃の指摘をすると、ほとんどの受講生が自分で考えたことを英語で書いているという結果が出た。

### 4. アセスメント

この授業では、自己のアクティブラーニングでの学びを受講生個々人にふりかえりセッションで確認してもらい、リフレクションで可視化した。

- A. 授業開始時と最終週の時点での自己の学びについての問診票でレーダーチャートで可視化し、自己診断した。

- B. 本授業での学びの意識の変化グラフ（個人レベルを暖色系の線、チームレベルを寒色系の線で表示。アップ、ダウンの根拠を自己分析）
- C. ライフロング・ラーニングの目標設定（本授業の後に次のステップとしてどう学びの行動するのか）
- D. 自由記述の俯瞰的・総合的なふりかえりシート（本授業開始時に立てた個人の到達目標への到達度の確認、根拠、）

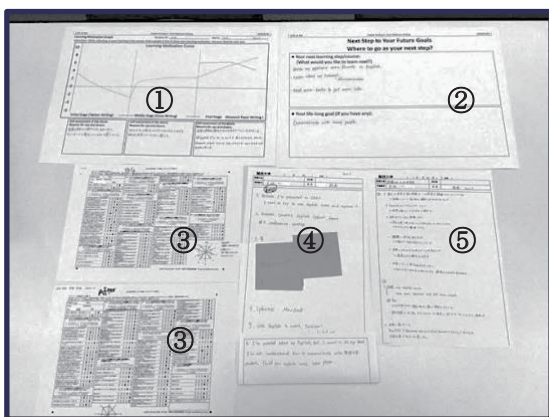


図7. ふりかえりセッションの資料・成果物  
(上から、①モチベーショングラフと自己の学びの  
アセスメント・②短期中期の学びの目標設定・③  
学期初めと学期終了時の学習態度問診票、④授業  
開始時の学びの目標設定・⑤俯瞰的総合ふりかえ  
り)

このセッションでは、自分の学びを俯瞰的に確認することを主眼として、15 週前の自分と受講後の今の自分を対話型で比較することで自己の学びを自分自身で確認してもらう機会を提供した。授業内で繰り返し案内し、ふりかえりセッションに欠席の場合、つまり、自身の学びのふりかえりを怠った受講生の成績は不可とした。

## 謝辞

本授業の運営に際し、英語のアカデミックライティングに専念した元国際部のカイト教授、現名誉教授にライティングコースの運営・指導について過大なるアドバイスをいただいた。感謝の意を表する。

## 参考文献

- Anderson, T. (2008). "The theory and practice of online learning". 45–74.  
([http://www.aupress.ca/books/120146/ebook/99Z\\_Anderson\\_2008Theory\\_and\\_Practice\\_of\\_Online\\_Learning.pdf](http://www.aupress.ca/books/120146/ebook/99Z_Anderson_2008Theory_and_Practice_of_Online_Learning.pdf)) (2020.01.20)
- Davis, L. (2011). Revised Bloom's Taxonomy.  
(<https://www.slideshare.net/LauraDavis/blooms-taxonomy-made-easy>) (2020.01.20)
- Boling, E. C., Hough, M., Krinsky, H., Saleem, H., & Stevens, M. (2012). Cutting the distance in distance education: Perspectives on what promotes positive online learning experiences. *Internet and Higher Education*, 15, 118-126.
- Bonk, C. J., & Graham, C. R. (2006). The handbook of blended learning environments: Global perspectives, local designs.  
(<https://books.google.com.mx/books?isbn=1118429575>) (2020.01.20)
- Engeström, Y. (1999). Activity theory and individual and social transformation. In Y. Engeström, R. Miettinen, & R.-L. Punamäki (Eds.), *Perspectives on activity theory* 506–518. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Flavin, M. (2016). Disruptive conduct: The impact of disruptive technologies on social relations in higher education. *Innovations in Education and Teaching International*. 53, 3-15.
- Fry, N., & Love, N. (2011). Business lecturer's perceptions and interactions with the virtual learning environment. *International Journal of Management Education*. 9. 51-56.
- Glazer, H. R., & Wanstreet, C. E. (2011). Connection to the academic community: Perceptions of students in online education. *Quarterly Review of Distance Education*, 12(1), 55-62.
- Graham, C. R. (2006). Blended learning systems. Definition, current trends, and future directions. In C. J. Bonk & C. R. Graham (Eds.), *The handbook of blended learning: Global perspectives, local designs*. 3–21.  
(<https://books.google.com.mx/books?isbn=1118429575>) (2020.01.20)

- Horizon 2020. (2018) Funding, Tenders.  
(<https://ec.europa.eu/programmes/horizon2020/en/what-horizon-2020>) (2020.01.20)
- INSTITUTE FOR THE FUTURE. (2011) FUTURE Work Skills 2020. ([http://www.iftf.org/uploads/media/IFTF\\_FutureWorkSkillsSummary\\_01.gif](http://www.iftf.org/uploads/media/IFTF_FutureWorkSkillsSummary_01.gif)) (2020.01.20)
- Kite, Y. (2017). Writing Program (ESL, the Mirror of the Actively Learning Mind). Workshop on ICT-Enhanced Writing Programs to Enrich the Active Learning Curriculum for Liberal Arts Education. *ISGC 2017*.
- Kozma, R. B. (Ed.). (2003). Technology, innovation and educational change: A global perspective. *Eugene: International Society for Technology in Education International Association for the Evaluation of Educational Achievement*.
- Lajoie, S. P., Hmelo-Silver, C. E., Wiseman, J. G., Chan, L. K., Lu, J., Khurana, C., et al. (2014). Using online digital tools and video to support international problem-based learning. *Interdisciplinary Journal of Problem-Based Learning*.  
(<https://doi.org/10.7771/1541-5015.1412>) (2020.02.10)
- Law, N., Pelgrum, W. J., & Plomp, T. (2008). Pedagogy and ICT use in schools around the world: Findings from the IEA SITES 2006 study (CERC Studies in Comparative Education). Hong Kong: Springer, Comparative Education Research Centre.
- VISION 2020. (2014) Vision 2020 – Education.  
([http://www.planningcommission.gov.in/reports/genrep/bkpap2020/14\\_bg2020.pdf](http://www.planningcommission.gov.in/reports/genrep/bkpap2020/14_bg2020.pdf)) (2020.01.20)
- Waddoups, G. & Howell, S. (2002). Bringing online learning to campus: The hybridization of teaching and learning at Brigham Young University. *International Review of Research in Open and Distributed Learning* 2(2)  
(<http://www.irrodl.org/index.php/irrodl/article/view/52/108>) (2020.01.20)
- Walvoord, B. E. (2014). *Assessing and Improving STUDENT WRITING in COLLEGE. A Guide for Institutions, General Education, Departments, and Classrooms*. John Wiley & Sons, Inc.
- Yamamoto, T., Watanabe, M., & Okunuki, M. (2017). Academic writing as corpus for assessment of ePortfolio. *2017 Pacific Neighborhood Consortium Annual Conference and Joint Meetings (PNC)*.  
(<http://ieeexplore.ieee.org/document/8203518>) (2020.01.20)